# 総合学科高校のこれまでとこれから

服部次郎（東京女子体育大学教授・前筑波大学附属坂戸高等学校長）

特集

検証　新しいタイプの高校

## 1　はじめに

総合学科高校が平成６年度に誕生してから13年が過ぎた。設置校も初年度の７校から全国２９６校（平成18年度）に増え、さらに今後も各都道府県の高校再編整備計画の進展と共に増え続けていく。平成18年度学校基本調査による学科別生徒数を見ると、普通科72・３%、工業科８・３%、商業科７・１%、総合学科４・２%となり、新興の総合学科はかつては職業学科を代表する一つであった農業科２・７%、家庭科１・４%を上回っている。

筆者は、平成６年度に開設した初年度校の一つに勤務して、準備・開設から平成17年度末に退職するまでの12年間を総合学科に関わり続けてきた。また、その間、全国総合学科高等学校長協会の役員もして、全国の総合学科の様子を見てきた。その経験を踏まえて、さらに、昨年度は外部の立場から総合学科を見ることになった視点も加えて、総合学科のこれまでとこれからについて述べてみたい。

## 2　総合学科の成り立ち

総合学科は、昭和62年の臨時教育審議会による「個性重視の教育改革」の提唱、それを受けた平成３年の第14期中央教育審議会答申における「総合的な新学科」の提案に始まる。

総合学科誕生の現実的な背景を簡単に整理する。まず、昭和50年代になると高校進学率が90%を超え、高校生の70%以上が普通科に集中した。しかし、大学進学率は40%程度で、普通科の下位校では、受験対応のカリキュラムを消化できない生徒が問題行動や学習不適応を起こし、大量の中途退学者を生じさせた。一方、高度成長期に生産現場の中堅技術者の供給源として機能してきた職業学科は、日本の産業構造の急速な変化に対応

できずにいた。高度知識産業の時代になって高校生の労働市場は狭まり、職業学科を出ても就職できないとなれば、職業学科も大量の中途退学者を生じさせる困難校状態に陥っていった。

「平成の高校教育改革」の目玉となった総合学科の誕生は、行き詰まった普通科下位校や職業学科の困難校状態を改善し、「生徒が生き生きと伸び伸びと学習できる学校を創る」という困難校再生の課題を負っていた。

もう一つの総合学科の使命は、少子化対応からやがてやって来る高校再編整備の際に都合のよい柔軟な学校システムをつくるということであった。普通科と専門学科の二つの学科しかないとしたら、今日の高校再編整備計画はこれほど円滑には進まなかったであろう。

## 3　総合学科の準備は明るいイメージづくり

まれな例外を除いて、ほとんどの総合学科は、行き詰まった困難校状態の普通科下位校や職業学科を改編したり、あるいはそれらを統合する形で開設された。だから、総合学科は、これまでの「暗い、抑圧された、閉塞的な困難校イメージ」を払拭して、「明るい、開かれた、生き生きと、伸び伸びと、楽しい学校イメージ」をつくることから準備を始めた。明るいイメージの校名に変え、「学校案内」に工夫をこらし、ホームページを立ち上げた。夏休みに繰り返し「学校説明会」を開催し、教員が分担して中学校訪問に回るなど、広報活動に力を入れた。入試も学力検査を苦手とする志願者に配慮して、「自己アピール」が可能な方法を取り入れた。

多くの総合学科では、改編によって、志願者は大きく増えた。「生き生きと、伸び伸びと」「君の夢、応援します」「自分探しの旅に出よう」などの、それぞれの総合学科で工夫を凝らしたイメージ戦略は、功を奏したといえる。そのことは、高校が自らで生徒を集めなければならないという教師にとっては辛い時代を迎えたことを意味していたが、同時に、教師が力を合わせて頑張ると学校が変わることも如実に示していた。

## 4　システムの根幹は「選択制の時間割編成」

しかし、いくら明るいイメージを振りまいて生徒を入学させても学校の内実が変わらないことには、学校は活性化しない。総合学科が、普通科や専門学科の従来の学校との相違点を最大限強調した点はなにか。それは「好きな科目を選択できます」ということであり、そのことは「嫌いな科目は勉強しなくても卒業できます」ということを意味していた。学習の不得意な生徒を相手にする総合学科は、学習の系統性や専門性よりも、生徒が「生き生きと、伸び伸びと、楽しく学ぶ」ことを優先したといえる。

「好きな科目を選択できます」ということを総合学科の最大

の売りにした以上、「選択制の時間割編成」が総合学科のシステム作りの根幹になった。しかし、この作業は困難を極めた。コンピュータの導入も検討されたが、億単位にも及ぶ設備投資資金は学校にはなく、一部をシステム化する程度は行われたが、本格的にコンピュータ化された時間割編成の例はなかった。やむなく教員の手作業による各校ごとの創意と工夫を凝らした独特の方法が編み出されていき、教員の膨大な編成作業の上に総合学科の「選択制の時間割編成」は維持されていった。

「好きな科目が選択できます」といいながら、言葉通りに自由に科目選択させられる学校はほとんどない。それは絶対に不可能である。教員の数、教室・設備の数、さらには科目の系統性などによって選択の制約や条件は生じるのはやむを得ない。しかし、どれほどの科目選択の制約や条件があろうとも、生徒が自らの個性や生き方を考えて、将来の進路選択に役立つと思われる科目を選択するときに、生徒は「自ら選んだ科目に責任を持つ」という主体的な自覚を持つ。多少の制約はあろうとも科目選択の自由がもたらす生徒の主体性確立の効果は大きい。

## 5 「開放型自由選択制」から「系列選択制」へ

総合学科では、その学校の特色に応じた幅広い選択科目を開設するが、それらの選択科目を学問領域や系統性・専門性によって括って、「系列」として示す。自然科学系列・人文科学系列・エコロジー系列・情報科学系列・生活福祉系列などである。総合学科では、本来、「系列」は科目選択の目安であって、専門学科の園芸科・機械科・建築科・福祉科などのように生徒の所属を意味するものではないとされた。すなわち、総合学科では自然科学系列の科目を中心に選択している生徒も、人文科学系列やエコロジー系列の科目も選択できるという「開放型自由選択制」が総合学科の本来の選択制とされた。これは総合学科が従来の学校の「画一性・硬直性・閉鎖性」を打ち破って、「個性重視の柔軟な開かれた明るい学校」を主張する際の大きな武器となった。

だから、開設当初の困難校イメージを払拭しようとしているときは、できるだけ幅広い分野の科目選択が可能な「開放型自由選択制」が効果を発揮した。学習が得意でない生徒は、苦手な科目は避けて興味・関心のある科目を選択できるということに大きな開放感を持つことができる。「苦手な科目も努力しなければいけない」という正当な説教は、このレベルの生徒には通じない。とにかく、興味・関心の持てる科目を真面目に勉強させて高校を卒業させることが総合学科の使命だった。

そうやって開設して数年の努力の成果として学校が落ち着いてくると、生徒指導の課題が減って、逆に進路指導が課題になってくる。「生き生きと、伸び伸びと」した学校は実現した。「君の夢を応援します」といっているが、生徒はどんな進路を実現したかということが問われるようになってくる。生徒のレ

ベルが上がってくると、必然的に大学進学希望が増えてくる。そうなると「開放型自由選択制」は進学指導のネックになってくる。農学部に進学したいといっているのに「生物」「化学」を選択していない。工学部に進学したいといっているのに「数学」「物理」を選択していないということが起きてくる。

大学進学が主要な進路目標になって、学習が高度化してくると、「総合学科のつまみ食い学習」の弱点が出てくる。やはり、学問には系統性や専門性は不可欠である。そこで、選択制も総花的な「開放型自由選択制」から、ある程度の学習領域を絞った「系列選択制」へと移行することになる。「系列選択制」は、系列の領域が狭いと、専門学科との相違点がなくなるという危険がある。系列の領域を国際理解・情報・環境・福祉・健康などの横断的・総合的な現代的課題から広く取ることが必要である。また、どの系列からも選択できる「自由選択科目」を多く設定することが総合学科らしさを維持する上で大切である。

## 6　キャリア教育のモデルとなった「産業社会と人間」

総合学科がこの13年の実践で残した最大の功績は、キャリア教育の根幹となる科目「産業社会と人間」を確立したことである。本来、「産業社会と人間」は、総合学科の選択制カリキュラムに生徒を適合させるためのガイダンス科目として設定された。最終的には「履修計画作成」が科目の目標なのだが、そこに到達させるために「自己を知る」「産業・職業を知る」「進路を考える」という指導をしていくことによって、生徒の中に学習へのモチベーションが高まっていくことを確認した。

世に「学力低下」問題がかまびすしいが、総合学科では、もともと「高い学力の生徒」を教育しているわけではないので、知識習得型学力としての「学力低下」は問題ではない。問題なのは、「なんのために、なにに向かって、なにを学ぶべきなのか」という学習へのモチベーションを持てない生徒が学習不適応に陥っているということである。「産業社会と人間」は、「履修計画作成」を目標としながら、はからずも「なんのために、なにに向かって、なにを学ぶべきなのか」という学習の根本に触れて、眠っていた生徒の学習への意欲を呼び覚ました。

このことは、やがて、総合学科に限らず、日本の学校教育全体の問題として、「いかに子どもたちに社会参加への意欲と責任を持たせるか」というキャリア教育の必要の自覚を生み出し、そのモデルは、総合学科における「産業社会と人間」の実践であるということになった。

## 7　「総合的な学習の時間」の先行実践となった「課題研究」

もう一つの総合学科の功績は、「課題研究」の実践である。総合学科誕生の社会的背景をもう一度思い出してみれば、知識注入型教育が破綻して、多数のドロップアウトを生じさせてし

まったことへの反省として「生き生きと、伸び伸びと、学ぶ楽しさ」を大切にする総合学科が誕生したのである。そこで、また、ぎりぎりと知識・技能の量を問う偏差値的学力が生徒にとっての到達目標になったのではなにも変わらない。生徒が「好きな科目を選んで、生き生きと、伸び伸びと、楽しく学んだ結果」を形に表すものはなにか。そこで、総合学科の学習成果として重視されるようになったのが「課題研究」である。

「生徒が自ら課題を設定し、調査・実験・観察してデータを収集し、分析し考察して、論文・作品・模型などにまとめ、発表する」のが「課題研究」である。専門学科ではすでに行われていたが、多分に教師主導的なあらかじめ課題の決まっている「課題研究」であったことは否めない。総合学科では、これを真に生徒が主体的に取り組む「課題研究」にしようと努力した。これも「言うは易く行うは難し」で、当初は生徒自身で課題を見つけること自体が困難であった。知識習得型学力と課題解決型学力は相反するものではなく、知識・技能を習得することが不得意な生徒は、課題を発見し解決する能力も高くないのは確かである。しかし、教師たちの試行錯誤の後に、「課題研究」の指導体制や指導計画が確立してきて、また、「課題研究」の成果を持ってAO入試・推薦入試に挑戦し、一般入試では到底合格できないような偏差値の高い大学に合格できるようになってくると、生徒の主体的な研究のモチベーションもがぜん上がってきて、驚くような研究成果が生まれることになった。現行学習指導要領の目玉である「総合的な学習の時間」は、総合学科における「課題研究」を先行実践として提唱されたといえる。

## 8 「ゆとり教育」の成果としての総合学科

「ゆとり教育」の見直しがいわれている。ほんとにそれでいいのか。総合学科は、なんのために生まれたのか。戦後の中等教育が受験競争・偏差値偏重・知識注入型の「詰め込み教育」に陥って、マニュアルを読みこなすのは得意だが、独創性・企画力・行動力・挑戦心に欠ける没個性的な「指示待ち人間」を多く生みだした。卒論も自分一人では取りかかれない大学生に驚いて、「偏差値偏重の詰め込み教育が日本を衰退させる」と騒ぎ出したのは学力の高い生徒を抱える上位大学の教師たちである。

その一方で、すべてを受験学力の偏差値に集約させる単一的価値社会の学校に適応できずに大量のドロップアウトが生じていた。この病弊を改革しようとしたのが「ゆとり教育」路線である。総合学科も「ゆとり教育」の申し子として生まれた。

最近の教育改革論議では、「ゆとり教育」を見直して、授業時間を増やす、土曜日の授業を復活させる、学習指導要領の内容を増やすなどといっている。やはり、学力を知識の量として捉えているような気がしてならない。今、問題になっている学力低下は、知識の量が足りないのではなく、学ぶ意欲、つまり

学習のモチベーションが持てないことなのだ。そのために総合学科が取り組んできた「産業社会と人間」のようなキャリア教育の実践をこそ、もっと充実させるべきだと考える。

受験学力の高いことが唯一の価値であった学校を改革して、もっと多様で豊かな学習成果を結実させて見せたのが総合学科の「課題研究」である。国際比較の学力調査でも日本の弱点として指摘されたのは「自ら学び自ら考える力」の不足である。学力不足をいうならば、「課題研究」のような、言い換えれば「総合的な学習の時間」の充実にこそ取り組むべきと考える。

たしかに学校現場では「総合的な学習の時間」は必ずしも成功してはいない。それはなぜかというと教師にとって知識伝達型の授業はたやすく、課題解決型の授業は手間暇かかって難しいからである。「総合的な学習の時間」は「生徒が主体的に取り組む活動」だからといってほとんど放任しているような教師が現実に存在すること自体、趣旨がまったく理解されていない。生徒が自らで課題を見つけ、自らで解決のために取り組む活動をするためには、教師によって周到に準備され、綿密に計画された指導計画があってこそ可能なことである。「総合的な学習の時間」を成功させるためには、教師が教室で一方的にしゃべり続ければいい知識伝達型授業よりもずっと長い時間のかかる手間暇かけた懇切な指導が必要なのである。

しかし、手間暇のかかる指導を避けようとする教師ばかりを責めることはできない。教師の意欲をそぐような管理統制にばかり汲々とするのではなく、教師がもっと伸び伸びと「総合的な学習の時間」の指導に時間をかけられるようなゆとりのある学校にすべきなのである。

## 9　これからは総合学科の時代である

ついに「2007年問題」の時代になった。教育界にとっての07年問題は、団塊世代教師の大量退職もさることながら、ここでいうのは「大学全入時代」の始まりである。上位の有名難関大学の受験競争は残るであろうが、そこには参加できないほとんどの高校生にとって、もはやほとんどの大学は「書類を出せば入れる」ところになった。大学生というステータスは薄れて、専門学校との差は、修業年限の差でしかなくなった。むしろ、専門学校の方が就職に直結する技能や資格が取れるということで評価は高まりつつある。総合学科では、高大連携ではなく、高専連携（総合学科と専門学校との連携）の道を探るべきと筆者は日頃より提案している。

このような時代に、日本の高等学校の学科別構成は、冒頭で述べたように普通科72・3%、工業科8・3%、商業科7・1%、総合学科4・2%である。なぜ、このように普通科に集中したのか。それは誰しもが大学進学によって社会の上位もしくは中位の席が確保されると信じたからである。かつての時代でも社会の上位の席を確保できるのは、地域の公立名門校や国立・

私立の中高一貫進学校など少数の普通科に限られていたのだが、「大学進学しなければよい人生は得られない」という社会的信仰は、普通科への集中を加速していった。

普通科のカリキュラムは、なにをモチベーションとして学習させるか。大学受験である。そのことすべてを否定するものではない。たしかに社会のトップリーダーを育成するためには、あらゆる分野に発展しうる広くて深い知識の量が必要である。筆者の知る進学有名校では、ほとんど文系・理系のコース分けなどせず、あらゆる分野に精通することを生徒に課す。文系を目指す生徒にも微分・積分の難しい問題を解かせる。生徒はたまに自らに「なぜ、好きでもない科目を勉強しなければならないか」と問いかける。答えは「目前の大学受験に必要であり、さらには高度な学問には広くて深い基礎学力が必要だから」である。そして、「大学に入るまでは好き嫌いは学習のモチベーションにはならない」と自らに言い聞かせる。受験勉強の禁欲生活に耐えた者だけにトップリーダーへの道が開かれるのは公正なことであり、07年問題後もそのことに変わりはないと思われる。

しかし、「大学全入時代」に、72・3%の普通科のうち、このように「大学受験に必要だから」という理由で学習のモチベーションを維持できる普通科は、どれほどあるだろうか。多めに見ても20%程度か。残りの50%の普通科は、どうやって生徒のモチベーションを高めていくのか。「数学なんてわからなくても生きていけるよ」「英語なんて一生しゃべらないよ」という生徒に、どう学習に向かわせるのか。学習不適応は、授業時間の不足ではなくて、学習へのモチベーションの不足である。

「なんのために、なにに向かって、なにを学ぶべきなのか」が明確にできない生徒が学習からドロップしていく。逆に適切なモチベーションを与えることができれば、「数学なんてわからなくても生きていけるよ」とふて腐れていた生徒が、必死で数学を勉強し始めるなんてこともある。

約50%の中位・下位の普通科では、これまでの知識注入型の受験教育が役に立たなくなることは、「大学全入時代」の受験指導に最も敏感に反応している進学予備校の対応を見れば明らかである。先を見る目のある予備校では、これからの大学受験の主流は「AO入試・推薦入試」になると見て、それに対応する課程を打ち出している。これまで総合学科が力を入れてきたAO・推薦の大学入試が受験の主流になっていくのである。

現行学習指導要領は、各学校において「創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で」「個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と述べている。大学進学という御旗を掲げて横並びの画一主義でやってきた中位・下位の普通科は、高校再編整備時代に生き残るためには、いかに「個性的な特色ある高校」に改編できるかが問われることになる。これからは中学生が高校を選ぶ時代である。普通科という「なんの特色もない高校」が生き残れる保障はない。そのとき「特色ある学校

づくり」の先行事例となるのは、各地で奮闘してきた総合学科である。これからは、総合学科の時代である。

かつて総合学科を推進した文部科学省の責任者は、「やがては総合学科が普通の高校といわれる時代が来る。トップリーダーを育成する2割の普通科、スペシャリストを育成する2割の専門学科、そしてごく普通の高校生が通う6割の総合学科が、未来の高校の学科構成である」と述べた。筆者もそう信じて総合学科の普及に努めてきた。総合学科は、ごく普通の高校生が、自分を見つめ、将来の生き方在り方を考え、生き生きと伸び伸びと学びながら進路選択をしていく、そういう中堅国民教育機関になっていく。総合学科のますますの発展を祈ってやまない。

〈参考文献〉

・服部次郎「総合学科改編をめぐる教員の意識―筑波大学附属坂戸高等学校の教員意識調査に基づいて―」（『筑波教育学研究』筑波大学教育学会編　第3号　2005年）
・服部次郎編著『産業社会と人間―よりよき高校生活のために―』学事出版（2003年）
・服部次郎編著『産業社会と人間　実践の手引』学事出版（2004年）
・服部次郎「子どもの社会的自立とキャリア教育」（山口満編『子どもの「社会的自立」の基礎を培う』教育開発研究所　2007年）

情報募集のご案内

# 先生方も編集委員です。

**本誌では、読者の皆様からの投稿・情報・資料をお待ちしております。**

現在、高校教育は改革の只中にありますが、地方毎、学科毎に改革のスピードも異なり、内容も多様です。先生方の身近な教育情報を中心にお寄せいただき、幅広く高校改革について把握していきたいと考えておりますので、是非ご協力下さい。

また、本誌への御意見・御要望をお待ちしております。

※お送りいただいた原稿等は、原則として返却いたしません。
※本誌掲載の際は、編集部よりご連絡させて頂きます。

〔お問合せ・送り先〕

学事出版㈱『月刊高校教育』編集部
〒101-0021　東京都千代田区外神田2-2-3　E-Mail koukou@gakuji.co.jp